
草原の歌に花言葉を

かがみ豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草原の歌に花言葉を

【Nコード】

N6273W

【作者名】

かがみ豆腐

【あらすじ】

自らの意思により、奴隷としての環境から逃げ出すことに成功したカルル。彼は王都を目指して草原を渡ろうとするが、その途中で狼に襲われてしまう。

そんな窮地に現れて救ってくれた者が居た。騎士はアカシアと名乗り、王都の追っ手から逃れるために荷馬車を貸してほしいとカルルに懇願する。

助けられた礼と、さらに幼き日の再会に感激したカルルはそれに快諾するが、それはつまり逃げ出してきた村をもう一度通りかかると

いう意味でもあった。

しかし引き返してきたカルルたちが目にしたのは、焼け跡と化したかつての村だった……。

序章（前書き）

だれだって幸せになりたいのです。奴隷も、英雄も。

そのために逃げて、時には戦います。

それぞれが理想を求めて現実に向かうのはどこの世界も変わりません。

これも、そんな大海の中の一つのさざめきのような物語です。

誤字、脱字、わかりにくい描写や比喩表現など、おや？ と感じられた部分がありましたら指摘して頂けると幸いです。

序章

痛いほどに冷たい雨が降っていた。

そのおかげで人目はなく、家から出る者がいないのは幸いであった。誰にも見られたくない。

長い付き合いだった手枷は、足元に倒れる男の持っていた鍵束で外れてくれた。

家から運び出した荷物を手早く荷馬車に積み込むと、彼は長年世話をさせられてきた馬に囁きかけた。

「逃げ切れると思うかい？」

ぶる、と馬は嘶いた。彼が喋ると必ず相槌を打ってくれる。

「……行こうか」

彼が軽く手綱を打つと、ゆっくりと木の車輪が回り始めた。

草原の出会い

緑の海。……と言うそうだ。実際の海を見たことはない。

見渡す限り、視界には草原がどこまでも広がっている。

肌を焼く日差しは暑いくらいだが、風がなんとも心地よく吹いている。秋は近いらしい。

緑色をかき分けた目の前の一本道は朝からずっと変わらないが、景色の中で太陽だけが段々と低くなってきていた。

自分がいなくなったことで、今ごろ村は大騒ぎだろう。

だが、もうそんなことはどうでもいい。あんな村に縛られることがなくなり、ようやく自分は自由を手に入れたのだから。

ふと、空を仰ぐ。

青と白だけの空を、こんなにも美しく綺麗だと感じたのはいつ振りだろうか。

その天井が赤みを帯び、太陽が地平の境に沈んでからはあつという間に気温が下がり始めた。

そろそろ夜の準備をしたほうがいいのだろう。

なにぶん旅は不慣れなのだ。漠然とした不安があつてなかなか気楽にはなれない。

こんな時にはどうする、程度の知識があるだけで、具体的な経験というものはまったくない。

「冷えこんできたな……」

苦労してようやく火がついたところには、もう空と雲の判別が怪しいくらいにまで暗くなってしまっていた。

「これだけだもんな……。さすがに心もとないよなあ」

一頭の馬が余裕を持って引ける大きさの荷馬車。これにカルルのすべての持ち物が積み込まれている。

干した肉とライ麦の黒パンを齧って腹を満すと、カルルは毛布を掴んで荷台に上がり、寝転がって星空と向きあった。

「綺麗だ……」

それ以上の言葉はなく、そういえばと体を半分起こした。

「火、大丈夫かな。離れてるから燃え移りはしないと思うけど……大丈夫だよな」

焚火の火は獣除けになると聞いたことがある。薪はこの草原では貴重だが、なるべく火は絶やさないほうがいいだろう。

また横になって目を閉じた。すると耳が冴えるのか、風の音も普段より聞き分けられるような気がした。

「……………」

今のは何の音だ？

風の音にまぎれて一瞬、何かを感じた。音ではなかったのかもしれない。

再び体を起こし、月明かりしかない薄暗い草原を見渡した。

「……気のせい、かな」

結局何も見つけれられず、やがて睡魔に負けてカルルは深い眠りに就いた。

「……………」

今の音はなんだろうか。

さっきも同じようなことがあった気がする。

だが、確かに今しがた、獣の鳴き声のような……。

強く砂利を踏む足音。

次いで、獣の悲鳴。

「っ！」

カルルは跳ね起き、周りを見た。

誰かが、誰かの背中が見える。暗くてよく見えないが、何をしているのかはすぐにわかった。

ようやく目が暗闇に慣れてくると、三頭の狼がそこにいた。頭を低くし、唸り声をあげてその人物を遠巻きに威嚇している。

自分なら早々に腰が抜けてしまう状況なのだが、その後姿の人物は臆することなく凜と拳を構えていた。怖くはないのだろうか。

そして、あつという間もなく一頭の狼が飛び掛って　　思った時には、すでに引いていた拳でその鼻先を迎え撃っていた。

すごい。

思わず見惚れていた。

しかし次の瞬間に別の狼が襲い掛かり、その者の太ももに獣牙を喰いこませた。

「　　」

好機とばかりにもう一頭も続き、わき腹にぶらさがるように食らいつく。

悲痛な声に我に返ったカルルは、何か武器になりそうなものとはと荷台を見渡し、それを見つけた。

長剣。

護身にとカルルが前の家から持ち出したそれ。未だろくに素振りすらしたことがなかった。

……だからと言って、いざ実戦となるとこんなにも重く感じられるのだろうか。

これを持って野生の狼に挑み、その毛皮を切り裂き、肉を断つ。怯えているのが自分でもよくわかる。

怖い。狼は怖い。そんなのと命を懸けて戦うのはもっと怖い。自分は何んと臆病なのだ。このままでは……。

「　　っ！　　」

その結果にこそ、カルルが一番恐怖を覚えた。

「……う、……わあああああっ！！」

暗闇で鈍く光る長剣を握り締め、荷台を飛び下り、地面を蹴った。そしてすぐにその瞬間は訪れた。

突然の雄叫びに狼はカルルの存在に気づいたが、獣の性が簡単には咬みついた顎を離そうとはしなかった。獣の黄色い目がぎよりと彼を睨み付けるが、それに怯むほどの思考の余裕はもう残っていない。

ない。

たとえ剣としては使えなくても……！

ドゴツ、というどちらかといえば打撃のそれに近い音のあと、足に咬みついていた狼が白目をむいて倒れた。

まさか本当に倒れるとは、とカルルが驚いている数秒の隙にもう一頭の狼は離れてこちらの様子を伺っていた。

「……っ、君……」

「え？」

よく通る、澄んだ声だった。それ以上の感想を述べることに意味はなく、狼に目を向けたまま返事をした。

「だ……大丈夫ですか？」

大丈夫なわけがないだろう、とわかっていたがそう言うしかなかった。

カルルから詰めれば二秒か、狼からなら一瞬で詰められるであろう間合い。

不意打ちならばともかく、まともにやりあつて勝てる可能性などない。

「くそ……」

「剣を」

「え？」

「剣を。私に」

その騎士はいつの間に隣に立っていたのだろう。

ちょうどその時、すうと月の光が雲の隙間から闇の中へと注いだ。

その美しさに子供のころに見た天使が光の中から降りてくる絵を思い出す。

淡い月光に映える長い金色の髪。短く切り詰められた甲冑は傷こそ少ないが使い込まれた歴戦の貫禄がある。そしてその凜とした翡翠色の双眸。……美しい横顔だった。

思わず息を呑んだカルルは女性の言葉を忘れてしまっていた。

「剣を。私にまかせてくれ。きっとあれを倒して見せよう」

我に返ったカルルは狼に注意をむけたまま慎重に剣を渡した。まともに使われたことなどない真新しい剣を見つめて、一言。

「少年。逃げることを恐れた臆病者のことを、人は英雄と呼ぶのだ」

その時、弾けるように鋭く　　狼が跳び上がった。

一瞬の出来事だった。

薄いマントを翻らせ、まるで舞踏でも踏むかのように騎士はそれを真つ二つに斬り伏せていた。

「……私は成り損ねたがな」

夜風に吹かれて

「うむ、美味しい」

さっきの貫録はどこへやら。

妙齡の女性特有の愛嬌に満ちた、至福の表情でそう感想を述べると騎士はまたひと口と狼の肉を頬張った。

聞けば名はアカシアと言うそうで、仕留めた狼の肉をたき火で炙っては口へと運ぶ彼女からはなんとも旅の経験が伺える。

「しかし危なかった。陽が落ちて草原をさまよっていると、遠くに火の光を見つけてな。私がたどりつく前に火は消されてしまったのだが、どうも獣の気配を感じたのだ。放っておくわけにもいかず、というわけだな。君が目を覚ましたのはそれからだ」

どうやら自分が寝ている間に狼に襲われかけていたらしい。それを彼女が助けてくれたということだそうだ。

「本当にありがとうございます。それと……、すみません」

「? どうしてカルが謝る」

「……もつと、……」

思い返すと情けなくて声がすぼんだ。

「ん? なんだ」

「もつと早く僕が出ていれば……アカシアさんは怪我をせずに済んだはずです……」

するとアカシアはふつと鼻から音を出し、水袋からひと口飲んで穏やかな口調で言った。

「カルのせいではない。それに君は私の手当てをしてくれた。それで十分さ」

小さな鎧の隙間から服を捲し上げるとわき腹が見えた。カルルの着替えを裂いた布が巻かれており、手当てをした時の柔らかい感触が脳裏に甦ったカルルは気恥ずかしくなって目を逸らした。

「ん。どうかしたのか?」

「い、いえ……なんでもないです」

「ふむ……。カル」

「は、はい」

「君は今、いくつだ？」

「へ？」

「年はいくつなのかと聞いている」

「年……は、十七です」

「私と三つしか変わらないな。君は敬語で話すのに慣れているようだが、もつと堂々としたらどうだ？」

「……そう、ですよ……。気を付けます……」

慣れているのではなく、今までそれしか出来なかった。だがしかしそれを彼女に言っても仕方がない。なにより自分について詮索を受けたくないのだ。

「まあ好きにすればいいさ。ところで」

「はい」

「私も荷台で寝ようと思うんだが……構わないかな？」

豪快な欠伸だった。せめて手で口を覆うくらい、と言っても恐らく無駄なのだろう。

「え……ええ」

「ありがとう。では、話の続きはまた明日な。おやすみ」

一方的に話を切ると騎士は荷台によじ登っておもむろに甲冑を脱ぎ捨て、寝転がるとすぐに静かになった。

「……ふう……むにゅ」

悪い人ではないのだろう。……たぶん。

ぱちぱちと燃えるたき火に残っていた木切れをすべてくべ、カルも眠ることにした。

「でもなあ……」

それがいくら小さな荷馬車で、多少の荷物が積んであるとはいえ、足を伸ばして寝るのには十分な余裕がある。

だが、そこに二人ともなれば話は別だ。

猫のように身を丸めて横になっているアカシアの隣には、カルルが寝るにはなんとも微妙な隙間が空けてあるのか、……それとも空いているだけなのか。

後者だった場合を考慮すると、ここに無理やり体を押し込むのは流石に遠慮するべきであろう。

「……寝るんじゃないのか？」

不意に目だけ開いてそう言われた。

「……もつと寄ってくださいよ」

「そうか、たしかに冷え込むからな。君がそう言うのなら」

「いや、ちよつと、逆です、そちに詰めてくれって意味です」

「ああ、そういうことか。……ん、これでいいか？」

「はい。……それで、アカシアさん」

「なんだ？」

「さつきあなたが話の続きは明日って……。でも、明日すぐに出発するつもりなんですけど」

「ああ、私もそのつもりだ」

「いえ、ですから。いつ、その話をするんです？」

「？ 道中でゆつくりと話せばいいと思うのだが」

「……ああ、アカシアさんも行先は都の方角でしたか」

「なに？」

「え？」

「王都に行くのか？ カルは」

「え、ええ」

「……まいったな」

のそりと起き上がるとアカシアは頭を抱えた。

「あの……僕が王都に行くとまずいんでしょうか」

「いや。カルではない。私が……。ふむ、やはり今話し合った

ほうが良さそうだな」

話し合い、と言いながらもアカシアの口調と眼つきには穏やかではない色がこもっていた。

英雄

一体、どれほどの敵を切り伏せてきたのだろう。

ずっと生き延びるために必死だった。

自分を殺しに来る敵が、ただただ怖かった。

名も知らぬ相手に剣を振り下ろすうち、いつしか『戦神アカシア』などと呼ばれるようになっていた。

それが使命と信じ込むことで、命を奪うことにすら躊躇しなくなつたのはいつからだろう。

……半月ほど前、ある国で権力の頂点だった国王が戦死し、その後を王子が継ぐことになった。

まだ若い王子は腹に一物を抱えた老人の言葉を鵜呑みにしてしまい、その国の英雄として讃えられていた者を処分することに決めたしまった。

それ自体はあまり珍しい話ではない。

未熟な跡継ぎが王たる資質を養うために失敗を重ねるのは自然なことだ。

だから、王宮に仕える親友にそれを告げられた時も大して驚きはしなかった。ああ、やはりそうだったのか、と。予感はしていた。

今の王に弁明の声は届かない。

だが、こちらとてそんな理不尽に殺されるつもりも毛頭ない。

ならば逃げよう。自分にはこの生き方しかできない。

幸か不幸か、物心ついた時には家族はどこにも居なかった。しかし、自分が姿をくらましてその幫助を問われないよう、忠誠を誓ってくれた部下を裏切る必要があつた。

あの、何事にも生真面目だった部下。

自分の娘ほどの年齢の相手に、彼は気を失うまで殴られることも厭いとわなかった。

何度も殴打され、痛みを叫ぶのは部下のはずなのに、自分ばかり

が泣いていた。

そして、夜中に門兵が全員居眠りをしている隙を突いて門をくぐった。

寝言と言いはる彼らに独り言の別れと礼を残し、夜の草原へと馬を走らせた。

死神とまで謳われた英雄が、死刑を前にして逃亡。

後ろ指などいくら刺されても痛くも痒くもないが、同じ釜の飯を食った連中との別れはやはり辛かった。

逃走劇は成功したように見えた。自分自身、安心して馬に気を遣う程度の余裕も持ち始めていた。

だが、若い王は早く実績を作りたいかったのか、裏切り者の処分に特に力を入れて動いたらしい。

追手は予想よりもずっと早く追いつき、馬を射止められてしまい応戦を余儀なくされた。

戦いには勝利したものの、自分は剣と馬を失い、追手の者も死ぬ間に愛馬を道連れにした。

結局、自分の足で草原に行くしかなかったのである。

捕らえられれば裁判もなく処刑されるだろう。あつけないほどに生き残るには王国が滅びるか、追手の及ばない他の勢力圏まで逃げ切るしかない。

「アカシアさん？ どうしたんですか、急に黙って……」

「……カルル」

「はい？」

「頼む。どうしても私は王都から早く離れたいのだ。そのために……この馬を貸して欲しい」

これほど必死に人にものを頼んだのはきつと初めてだ。だが、言葉を濁すカルルに胸の奥が重くなる。

「……頼む」

「……」

そう簡単に頷いてくれるとは思っていなかった。だからといって

手荒な真似をするのは本当に最後の最後にしたい。

そんなことを考えているうちに、ふと疑問が浮かんだ。

逆に、どうして彼は王都を目指すのだろう。理由もなく人の頼みを無下にするような性格には見えない。よほどの目的があるのだろうか。

「……なあ、カル。そういえば聞いていなかったが、君はどうして王都に？」

「」

より一層カルルの表情が強張った。それは何か、彼の触れられたくないモノに触れてしまった反応。

「カル？」

「……僕は……」

俯いて服の裾をぎゅっと握り、消え入りそうな声でカルルは言いかけた。だが次第に顔が青ざめ、ふつと。

「カルルっ！」

少年は気を失って倒れてしまった。

奴隷

くさい。……嫌いなにおいがする。

朝起きて一番初めに抱いた感情は『不快』。昨日も、今日も、明日もずっと。

「いつまで寝てやがるっ！ さつさと羊の世話をしろガキ！」

なにも言い返さない。言い返せないんじゃない。無駄なことをしないだけだ。

「つたく……使えねえ奴隷だ。たまつたもんじゃねえよ」

愚痴を溢しながら男が馬小屋から消えると、カルルはもそもそと起き上がって背筋を伸ばした。

そして、ため息。

家畜の糞尿の臭いが染み付いた寢床が、今度は仕事場になる。

仕事場と言っても、給金を貰って稼いでいるわけではない。馬車馬のように使われ、怒鳴られ、腹を蹴られ、いつしか夜になっている。

好きでこんなところに居るわけではない。この村は人さらに遭った子供が連れてこられ、様々な用途の奴隷として取引されてから使役される。

そして自分と同じような境遇の者は皆、目が死んでいる。最初はなんとか脱出しようと頑張るのだが、口数が減り、次第に表情が消えていき、瞳から光が失われて虚ろな目をするようになっていく。

自我を失って本当に家畜と同じになる者。悲観して泣きながら体中を嚙んで死のうとする者。

今では見ただけで、その子供があとどれくらいで諦めるかがわかるようになっていた。

誘拐されて七年も生き長らえた奴隷は初めてだと、誰かが話しているのを聞いた。

きつと、自分は運が良かったのだ。

すごく嫌なことをされても、その気持ちを和らげてくれる『抛り所』が自分にはあった。

それのおかげでどんなに辛くても歯を食いしほることが出来た。このオカリナを胸に抱くだけで、思い出が嫌なものをひと時だけ忘れさせてくれる。

吹くと持つているのが知られるから、毎晩指だけ動かしたりして思い出に浸った。

名前も知らない少女の笑顔。

お互いに吹きあつては笑いあつた記憶。

それだけがカルルを認めてくれた。どんなに軽蔑されても、それがあつたから聞き流すことができた。

その夜は珍しく、酒に酔った家の主人が鼻歌を歌いながら馬小屋にやってきた。

それつが悪く言っていることは半分ほどしか理解できなかったが、どうやらこの家の奴隷は長持ちだから買い替える金がかからなくて羨ましいな、と誰かに言われたそうだ。それと酒の酔いも相まってか「褒めてやろう」などということらしかった。

……なんとくだらない。

最初はあまりの馬鹿馬鹿しさに、呆氣に取られて舌の回らない男の話を聞いていた。

だが、ふと気づく。そして短い葛藤のあとに覚悟を決めた。

カルルは立ち上がると両手を繋ぐ枷の鎖を男の首に巻きつけ、交差させながら思い切り締め上げた。男の反応は鈍く、思ってもみなかったほどに非力だった。

ろくに体を動かすことがなく、よく肥えた首の肉に錆を擦りつけながら鎖が深く巻き付く。

「あ……やめろ、やめ……おっ……やめえあ」

あのふんぞり返って大きく見えていた奴が、実際は自分よりチビの禿げ頭でしかなかった。

こんな奴に……っ!!

自分の両手首を背負い込み、肩越しに力任せに引き上げる。
カルルが本気を出しきるまでの間、気持ちの悪い静寂があった。
そして、蚊の鳴くような断末魔を耳元で聞くと、腐った木の枝が
折れるような感触を得たのだった。

「　っ！」

勢い良く体を起こし、隣にいた誰かに掴みかかっていた。

「はあっ……はあっ……！」

ようやく自分が寝惚けていたことを理解してアカシアの体から手を離れた。抜きかけた短剣を収めると彼女は言った。

「かなり、うなされていたぞ。怖い夢を見たんだな」

「夢……？　……いや、……夢じゃない……」

「どうした？」

「………」

忘れることはできるのだろうか。

今までに受けた苦痛はそのうちに薄れていくだろう。だが、一線を越えた事実決して消えることはなく、記憶の付箋として残り続ける。

「大丈夫だ。何も怖いことなどないぞ」

頭を優しく撫でられた。

「ところで……君に聞きたいことがある」

ずい、と顔を寄せられて思わず身構える。落ち着いてきた呼吸が別の意味で乱れそうになる。

「ハロツサ、という町を知っているか？」

「　　！　………」

知らないわけがない。七年もの苦痛な歳月をそこで過ごしたのだから。

どんな顔をすればいいのか、そして自分は今どんな顔をしていたのか。悲しそうなアカシアの表情に申し訳ない気持ちが溢れてくる。

「……そうか。やはり、そういうことか」

推測が正しかった、とアカシアは声を落とす。

「君が気を失って、介抱しようとして見つけてしまった。その手首の跡は……見覚えがある」

「……………」

自分の手首を目でなぞった。外してから間もない鉄の枷の跡はまだはつきりと焼き付いたように赤く痣として残っている。

「君が都へ急ぐ状況も理解した。……だからこそ、頼む。君に降りかかる火の粉は私がすべて払う。だから」

「わかりました」

「……ん？」

「いいですよ。もう、おまかせします」

「カルル……？」

アカシアに背を向け、荷馬車から降りて夜の草原のしじまの向こうを見据える。

ハロツサから逃げ出したあたりから、薄々わかっていた。

都に帰ったところで、思い出を取り返すことなど出来はしない。

ましてや、あの時の少女との再開など夢に妄想もいいところ。

自分が木の枝で叩かれていた間に、少女は様々な経験をして喜怒哀楽を育み、素敵な女性になったのだろう。

あのひと時の幸福感を与えてくれた笑顔すら、実はもうおぼろげにしか思い出せない。

「……………」

オカリナの音色がして、ふり返った。

粗末な荷馬車の上、月明かりに照らされながらオカリナを吹いている者がいる。

それは彼女しかありえないのだが……そうではない、この吹き方を自分は知っているのだ。

いや、それ以前にこの旋律は……。

一息分ほどの演奏が終わると、彼女はオカリナを唇から離して咳いた。

「……不思議な感覚だ。すっかり忘れていたと思っていたのに、指が憶えている。耳が思い出して、また次の音が頭に浮かんでくる。とても心地が良い」

巧いか下手かではない。

その短い演奏にカルルは涙が溢れていた。

「ああ、……すまん、話の途中に。懐かしくてつい、手に取ってしまった。　って、おい、どうした？」

鼻声になるのが嫌で、黙って首を横に振る。

「大事な物だったのか……。悪かった」

「違うんです、そうじゃない……」

「では、どうしたと言った？　なぜ泣いている」

「あなたは……その曲をどこで？」

「　曲？　あ、ああ。今のはな？　私が幼いころに、ある少年から教わった曲なんだ」

ぐっ、と胸が詰まる。

そんなまさか。

「変な話をするが……私は戦災孤児でな。両親ともに失って、王都の孤児院で暮らしていたんだ。いつも一人で過ごしているような子供だったよ。同じくらいの年の子ともあまり遊ばないで、いつも形見のオカリナを吹いていたんだ」

戦災孤児。

王都の孤児院。

カルルにも懐かしい言葉だった。

夜中にトイレに起き出して、部屋に戻る途中でさらわれるまでは、カルルもそこで暮らしていた記憶がある。

「それで、私のことをじっと見つめている子供がいたんだ。新しく入ってきた子で、話を聞くとその子も私と似たような境遇だった」

その時はきつと、さぞかしモノ欲しそうな目で彼女のことを見ていたのだろう。オカリナを胸に抱えて警戒された覚えがある。

「聞けばその子も母親がよくオカリナを吹いてくれたらしい。その時にあの子から教わった子守唄、それがいま、私が吹いた曲なんだ」

「……その子とは、それから……？」

「ん、ああ……居なくなっただ。ある日突然、ぱったりと。迷子では……ないだろうな」

「じゃあ、その子の名前は」

「いや……。思えばなぜ聞かなかったのだろうか。あんなに仲良く……していたのに」

手に持った白い陶製のオカリナを見つめ、アカシアは思い返した。そうだ、あの時は貸したまま別れて、それであの子は居なくなっってしまった。あの時は形見を盗まれたと大泣きしたが……。

そういえばあのオカリナによく似ているなと思い、何となくそれを裏返してみた。

すると、見覚えのある一対の剣の紋章に目を奪われた。

とある貴族が戦での功労に剣の誉れとして王から授かった名誉ある家紋だ。

「……………え？」

それを見た瞬間、走馬灯のように記憶の断片が次々と甦った。

転んで危うく割ってしまいかけた時の傷や、それを隠そうと不器用な母が塗ってくれた、少し色の違う白色。

そして確信した。

「これは……」

間違いない。

これはあの時に失くしたオカリナだ。

「それをあの子に返すことだけを考えて、今日までなんとか生きてこれました」

「カルル……」

信じられないという顔でこちらを見つめる騎士は、あの立派な出

で立ちを忘れてしまうほどに幼く見えた。その姿に当時の記憶が重なり、再び涙が滲んできた。

「それはお返しします。何度助けてもらったかわからないけど……もう、無くても大丈夫だから」

「そうか……君はあの時の……あの時の……そうなんだな……？」

頷く。

言葉はなかった。口を開くよりも早く抱きしめられ、言葉が言葉にならなかった。

肩の後ろから声がする。目の前には暗い草原が広がっているだけ。何も見えないが、とても温かく心が安らぐ声だった。

「良かった……生きていた……生きてた……」

「……死んだと思ってましたか」

そう言つと、アカシアは肩を掴んで向き合う姿勢で言った。

「ばか、あんな小さな子供が急にいなくなったりしたら……、そう思ってしまうだろう……ばか」

「そんなに泣かれると……僕も困ります」

「……感情に我慢はしない主義なんだな」

鼻をすすりながら開き直つても様にはならない、とは言わずにおいた。

「そうか……うん、良かった。よし、寝ようか」

「え？」

背を向けてひとりで荷馬車にもどると、アカシアは半分だけふり向いてバツの悪そうな顔で返事をしてきた。

「いやはやなんというか……恥ずかしくてな。人前で泣いたことなんて本当に孤児院以来なのだ。寝て、今は忘れてくれるとありがたい」

思ったことをすぐに口に出す　　と言えはまあアレだが、ここまです直に感情を晒す人も珍しいのではないだろうか。案外、中身は昔のままなのかもしれない。

「なんだか想像してたのと違うなあ……」

しかし、思い出は思い出のまま美しくあればいいではないか。

運命は数奇なものと言う。その一端と納得すればそれまでのこと。親を失ったこと。誘拐されて売り飛ばされたこと。人を……殺めたこと。

ならば思い出の少女が狼を切り伏せる騎士になっていたくらい、なんということはない。

と、納得することにした。

「何の話だ？」

「いえ。なんでも。それより星が……綺麗ですよ」

「ん？ ああ、そうだな。まるで降ってくるようだ。すこし怖いくらいに」

「……………」

「くあ……おやすみ」

「おやすみなさい」

しかし残念なことにカルルにまどろみが訪れたころにはすでに空は白み始めていて、疲れもろくに取れていないと不機嫌に唸るアカシアには寝惚けて顔に蹴りを入れられた。

気まずそうに荷台で剣の手入れをする騎士という新しい荷物を乗せた荷馬車は向きを反転させ、新しい旅にカルルは手綱を打ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273w/>

草原の歌に花言葉を

2011年10月10日03時20分発行